

I 時代を超えた塔のまち・大阪

日本における本格的な仏教寺院としては最古のものとされる四天王寺は、593年造立開始とされる。当時、上町台地は河内湾に南から突き出た半島で、その上に四天王寺の五重塔が、難波津のランドマークとなっていた。

その後、安土桃山時代には上町台地の北端に羽柴秀吉が石山本願寺跡地に大阪城の築城を開始する。秀吉の死後、1614年の大阪冬の陣、1615年の大阪夏の陣により、大坂城は落城した。江戸時代に入ると、幕府直轄領に編入されたのを期に、1620年から大坂城の再建は始まった。

そして、昭和に入ると当時の大阪市長関一により再建が提唱され、市民の寄付金により1931年に大阪城復興天守（設計：古川重春）が竣工した。

古代より大阪のランドマークといえ、塔であった。港町としての視認性や、水辺に突き出した上町台地の見晴らしの良さも手伝って、四天王寺五重塔、大阪城ともに、都市の顔であった。

こうした大阪の顔としての塔をつくる動きは、近代に入ってから受け継がれる。明治時代、1903年には、大阪で第5回国勧業博覧会が新世界で開催された。初めて海外からの出品がされ、将来の万国博覧会を意識したものであった。その会場跡地に1912年に遊園地、ルナパークとともに建設されたのが、初代通天閣（設計：設楽貞雄）であった。当時は東洋一の高さを誇った、近代大阪を象徴する塔の誕生であった。太平洋戦争の影響により1943年には初代は解体されるが、戦後の1956年には民間により再建されている。新しい**通天閣**の設計は東京タワー、名古屋テレビ塔などを手がけた内藤多仲であった。塔の側面に設置された日立のネオンは当時から名物となり、道頓堀のグリコネオンとともに大阪の夜景をいまでも彩っている。

こうした大阪の顔としての塔は、現在はその役割の多くを超高層建築物が担っている。1993年に建設された**梅田スカイビル**（設計：原広司+アトリエ・ファイ建築研究所）は、立地による視認性の高さや、2棟のタワーとその頂部にある空中庭園展望台という独特の形状によって、大阪のランドマークとしての役割とともに、世界を代表する建築物のひとつとして、その評価も高い。2014年には四天王寺五重塔の南側に地上60階、高さ300mの日本で最も高い超高層ビルであるあべのハルカス（設計：シーザー・ペリ、竹中工務店）も竣工し、大阪の顔としての塔はその厚みを増している。



写真 大阪城 (出所 VIEWS OF OSAKA 大大阪)

01 通天閣



所在地：大阪市浪速区恵美須東 1-18-6
建設年：1956 年
構造・規模：S 造、一部 SRC 造 5 階、
地下 1 階
設 計：内藤多仲、竹中工務店

現在の通天閣は、戦後大阪の復興の象徴と言えよう。初代の通天閣は 1903 年に開催された第 5 回内国勧業博覧会の跡地に建てられ、1943 年の火災を機に解体されるまで、新世界のランドマークとして親しまれた。戦後に高度成長が始まると共に、通天閣復活の気運が高まり、1956 年に 2 代目が誕生。名称こそ引き継いでいるが、下部が凱旋門、上部はエッフェル塔を思わせるデザインだった初代に対し、2 代目は未来に伸びゆく工業主義的なイメージ。展望台の下のくびれや四方に突き出たトラスが、直線基調のシャープさを強調している。西洋がお手本だった時代の初代通天閣を懐古するのではなく、進取の伝統を引き継ごうという姿勢が、戦後大阪の復興の精神を表している。(倉方俊輔)

英紙タイムズが「世界を代表する20の建造物」に取り上げた
国際的な観光スポット

02 梅田スカイビル（新梅田シティ）

所在地：大阪市北区大淀中1-1-88
建設年：1993年
構造・規模：S造・一部SRC造40階、
地下2階
設計：原広司+アトリエ・ファイ建築
研究所



約50m離れて建つ2棟を最頂部の39・40階で接続させた、世界で初めての連結超高層ビル。高さ173mは完成当時、西日本一だった。外装の大部分を占めるガラスカーテンウォールに空が映り込み、「空中庭園」と命名された連結部が浮遊して見える。そこに空いた環に「空中エスカレーター」で上がる体験も前代未聞。細部には多様なデザインを混在させて、未来の集落を思わせる景観を形作っている。全体から部分まで設計者の建築観が色濃く、わが国でも数少ない、建築家の作品と呼ぶにふさわしい超高層ビルとなっている。物理的な高さで抜かれても、思想性の高さにおいては、いまだ世界でトップクラスだ。（倉方俊輔）